説教20220206ハバクク書3：1-6マタイ5：13-20「怒りのうちにも、憐みを」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

「怒りのうちにも、憐みを」という祈りは、一人の人間であるハバククが、主なる神に祈った言葉ですが、実は、主なる神のほうも、私たち人間に怒りによる裁きではなく、本当に甘い甘い憐みを与えたがっているです。その主なる神の姿は、有名な放蕩息子の父親のたとえ話で、息子の帰りを待ちわびて抱き留める父親の姿から推し量れることでしょう。

私たちの前に主なる神が怒りの姿で現れる理由は、間違いなく、私たち人間の側が、主なる神の事を良く知らない、ですとか、見誤って、見損なっていることにあります。父なる神は、どんなことがあっても私たちを忘れずに抱き留めてくれるお方だ、という真実を私たちが信じ切れないばかりに、かえって、父なる神を恨んでしまう、などという事を、私たちは平気でしてしまうのです。父なる神の応答が、ちょっとでも自分が思っていたのより遅ければ、もうそれだけで私たちは不安になって「何時までですか」などと言って父なる神に不満をぶちまけてしまうのです。

私たちが父なる神のその憐みに十分にあずかれるようになる道は、父なる神そしてイエス様の事を、よく知ることであります。関係を深めていくという事です。そうすれば、この地を去る時には、イエス様の憐みの御手に導かれて旅立って行かれます。

主なる神は、私たちに裁きではなく憐みを、へつらいではなく、愛の関係を望まれ、それが深められていくことを喜ばれます。有名なところではホセア書６章６節にそのように記されています。しかし、一方ではレビ記のような律法の書もあります。皆さんレビ記を読んで頂ければわかりますが、とにかく、何々してはならない、という禁止の言葉の連続であります。しかも、この禁止の言葉は、イエス様が登場するまでの旧約の民を、現実的に律していたのです。私たちはこんな風に、生活の一挙手一投足までも禁止の言葉で律せられては、やっていけないと思うのではないでしょうか。しかし神の言葉を忘れようとしている今の世に生きる私たちは、充分注意していないと、こんなレビ記のような世界に連れ戻されないとも限りませんので、どうかイエス様から離れないように歩んでまいりましょう。

さて、イエス様が地上にやってこられて、このレビ記などの律法の世界を生きている弟子たちを見て、どういわれたか、それは「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためではなく、しかも、律法の文字から一点一画も消え去ることはない。すべてのことが実現し、天地が消えうせるまでは」という事でした。つまり、レビ記などの律法の書は、その時が来るまで、そのまま保持されるという事を、イエス様は弟子たちに宣言されたのです。これを聞いた弟子たちは、がっかりしたことでしょう。わかり易く言えば、弟子たちは律法の書を盾にして、律法学者やファリサイ派の人たちから、あれもするなこれもするなと律せられ、支配されていたのでした。そんな弟子たちがイエス様に望んだこと、それは、今すぐにでも、自分たちを縛っているこの律法の一点一画を消し去って廃止してください、そうすれば私たちは自由になれます、という望みだったでしょう。でも、イエス様は弟子たちのそのような願望に、はっきりと「否」と言われました。それはなぜでしょうか。弟子たちは、イエス様が来られてからも相変わらずレビ記のような律法の世界に生き続けるように言われたのでしょうか。そうではありませんね。イエス様の意図することは、「私は律法や預言者を完成する」「あなた方の義は律法学者やファリサイ派の義に勝っていなければならない」というこの、完成する、勝っているという語句に込められています。

完成する、勝っているという意味合いは、それまでの世界が解消され統合され、そして一つ上の世界に生まれ変わるといった意味です。いわゆる正反合の弁証法的発展の様であります。そんな風に、イエス様の愛も、怒りの姿を薄めつつ、私たちに浸透していくのでありますが、イエス様の御言葉は、最初から私たちの耳に甘くささやいて来る愛の言葉の様には聞こえないのです。今日のイエス様の御言葉は、あなた方は、決して天の国に入ることができない、と言って終えられます。この厳しい御言葉が、あの憐み深い父なる神と同じお方なのかと思われるくらい、厳しい言い方です。人によっては聖書を読む時に、こんな風に厳しく響く御言葉は避けて、すぐにでも憐みを感じられる御言葉ばかりを選んで、聞いておられる方も居られるかも知れません。

しかし、聖書に記された御言葉は、それこそ一点一画に至るまで、全て憐み深い愛の言葉であります。私たちは、時間をかけてそして雑念を払って、御言葉に集中して聞いていくことによって、そのことを知るようになるでしょう。そうして主なる神が絶妙に塩梅して私たちに与えて下さる御言葉を、私たちは深く味わって、心に納めていくことが出来るようになります。そのように御言葉を深く味わえるようになること自体が、救いであります。私たちはそのようにして御言葉によって救われていくのです。

　御言葉を十分に味わうには、小さいことを大切にし、疎かにしないことが大事だと思います。今日の聖書箇所でイエス様も小さな事にこだわって話されています。律法の小さな掟を大事にして、それを守りなさい、と言われています。又、イエス様は小さな事に忠実であれば、大きなことにも忠実であると言われます。小さき者にしてくれたことは私にしてくれたこと、ともいわれました。イエス様にとって、小さいことととか大きいことは問題ではないのです。しかし、私たち人間はそれを問題にしてしまうのです。なぜならば私たちは小さいことは卑屈であり、大きなことは偉大であるという風に考えてしまいがちだからです。しかしそういう考え方は一つの罪であります。イエス様は私たちのその罪を十分ご存知ですから、その罪深さを踏まえて、小さいこと大きいことの話をされています。

レビ記もその禁止の言葉のうちの小さい方に目を向ければその特徴がよくわかってきます。例えば、レビ記１９章９節から「穀物を収穫するときは、畑の隅まで刈り尽くしてはならない。収穫後の落ち穂を拾い集めてはならない。ぶどうも、摘み尽くしてはならない。ぶどう畑の落ちた実を拾い集めてはならない。これらは貧しい者や寄留者のために残しておかねばならない。わたしはあなたたちの神、主である。」これは、ミレーの落穂拾いの絵画などでよく知られている聖句ですが、こんな小さな事も、レビ記は律しているのです。主なる神の御心は、正しく美しく非の打ちどころがありません。この聖句は恐れを感じさせるというよりは憐みに満ちています。私たち人間にとってこの聖句は憐みをもって受け取りやすいのです。しかし、多少漫画チックに描くとしたら、もし、私たちが農夫で農作業をしていて、その傍らにいる律法学者やファリサイ派の人たちに、農作業の一挙手一投足を監視され、畑に穀物やぶどうが残されるかどうかを逐一チェックされたとしたらどうでしょうか。そうして、このレビ記の律法を引かれて、「あなたは律法に違反して全て刈り取った」などとあげつらわれたらどうでしょうか。その時、律法学者やファリサイ派の人たちの口を通して語られるこの聖句は、全く主なる神が意図する憐みの味わいを損なうことになってしまうでしょう。

こういったことは古い時代の事なのではなく、今を生きる私たちにも当てはまることです。たとえ、聖書の御言葉に通じていたとしても、それを隣人に語る時に、なんの味付けもしないまま、時と所をわきまえずに、或いは律法主義者のように、語ってしまえば、律法学者やファリサイ派の人たちのしたことと同じ結果を招くかも知れません。

この様に見ていきますと、聖書に記された御言葉は、ほんとうに生きた神の言葉です。ですから、私たちは御言葉を語りそして聞くときに、小さな事に留意して、その表現や語り口にも十分に配慮する必要がありますし、又、そこにイエス様の憐みが立ち現れてくるのです。

ではこれからマタイ福音書の「だから、これらの最も小さな掟を一つでも破り、そうするようにと人に教える者は、天の国で最も小さい者と呼ばれる。しかし、それを守り、そうするように教える者は、天の国で大いなる者と呼ばれる。」という御言葉に深く聞いて参りたいと思います。

皆さん、この御言葉を聞いてどう感じられるでしょうか。イエス様、ずいぶん厳しいことを言われますね、と思うでしょうか。結論から申し上げますと、この御言葉は、憐みに満ちています。では、そう思えるように語っていきましょう。

イエス様は、ここでも小さい者大きい者を引き合いに出されています。私たち罪ある人間がこの御言葉を読む時、先ほども申し上げましたが、どうしても天の国で小さい者と呼ばれるなんて嫌だなあ、逆に天の国で大いなる者と呼ばれて偉人扱いされたらうれしいななどと、罪なことを想ってしまうものです。イエス様は私たちのその罪を承知の上で、このように語られたのです。罪のかけらもないイエス様は実はそんな風には思われないのです。最後の裁きの時や、天の国が描かれているヨハネ黙示録には、大きな者にも小さな者にも、という表現が３回出て来ますが、明らかに、イエス様は、大きいから偉大だ、小さいから卑屈だという様には考えられないのです。神の目から見れば、大きな者も小さな者も違いはないのです。でも私たち人間は大きな者小さな者の違いにこだわってしまうのです。何とか自分が大きな者になろうとして、もがき苦しむのです。

では、なぜイエス様はこの御言葉で、私たちの罪を思わせるような大きな者小さな者の話を引き合いに出されたのでしょうか。私たちは、誰しもこの御言葉を聞くとき、とっさに天の国で小さい者と呼ばれたくない、出来れば大いなる者と呼ばれたい、と思うことでしょう。その思いが罪であることは何べんも申し上げましたが、イエス様は私たちのその罪な思いをも利用されて、この御言葉で、小さな掟を守っていくことの大切さを、私たちに染みわたらせようとされているのでしょう。そして、ここからが重要ですが、イエス様はこの御言葉ではっきりと、小さい者も大きい者もどちらも、天の国に居ることを明言されています。「天の国で、」とイエス様ははっきりと言われています。私たちは、自分が偉大になろうとか言った罪な思いに捕えられていますと、ややもすると、こうした御言葉の小さな表現や真意を疎かにしてしまって、受け取れなくなってしまいます。

私たちは御言葉によって、そこに深く、或る意味秘められている、憐みによって、救われます。私たちは、罪から自由にされ、小さな者であろうが大きなものであろうが、天の国に有るのだという事を、この御言葉から聞き取ることが出来れば、又、一歩、神様の憐みに深められていきます。

そうして、更に、レビ記の様な、膨大な律法を一点一画まで守ることは、イエス様の憐みの霊なくしては無理だという事を私たちは悟り、ますます、イエス様の憐みにすがるようにさせられます。落ち穂を残すのは、律法学者の業ではなく、憐みの霊に寄るのです。そうして私たちはだんだんと自分が偉大な者になろうとする罪な思いから解放され、ただ、主なる神が与えたがっている甘い憐みの方にすがる者へと変えられていくのです。

私たちの教会が、憐みの霊に満たされる時、それが、律法学者に勝る私たちの義がいきわたる時であり、私たちが天の国の入り口に立つ時であります。

お祈りします

父なる

私たちはあなたの愛に満ちた御言葉を聞きながら、実はあなたの憐みに気が付かないでいる罪深いものです。どうか私たちの罪をお許しください。私たちがいつも御言葉と共に歩み、その憐みに気が付けるようにしてください。

風評や憶測が横行し、人の口がかまびすしい今の世ですが、どうか私たちが惑わされることなく、御言葉に固く立ち、恐れることなく、御国への道を歩んでいくことが出来ますように。

この地に建てられた教会が、あなたの憐みの霊に満たされて、教会の体の枝である私たちが、御言葉によって語り合うことが出来るようにしてください。小さな事まで全てをご存知であるあなたが、私たちの前にある小さなつまづきの石をも取り去り、私たちが安心して御国への道を歩めるようにしてください。

父と聖霊とともに